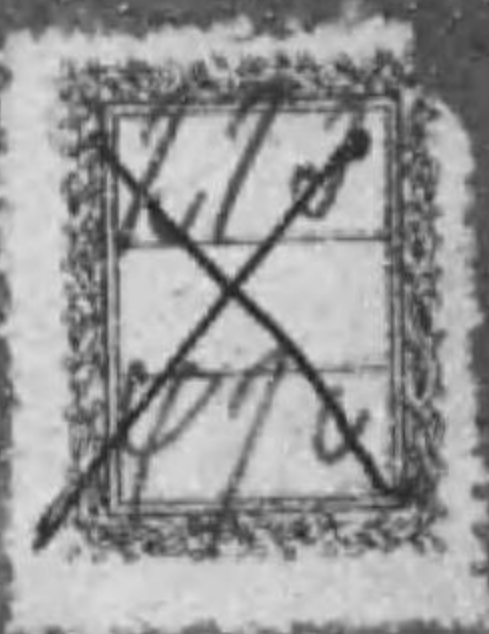


特116

682

千手



始



物116
682

三月
ツレテ
ワキ
宗茂



詞「是れは鎌倉殿の市内に。将野の介宗茂に

てい。偕も相國の忠子重衡の郷は。此の度

一の谷の合戦に生捕れ給ひいを。某領り

してい。朝敵の忠事とは申しながら。頼朝

痛はしく思召され。よくいたはり申せとの

忠子にて。昨日も千手の前をつかはされて

千手 三番目

備 (コイ合) の如く黒色活氣は高安流大鼓
の如く赤色は大食流小鼓
の如く藍色活氣は葛野流大鼓
の如く紅色は幸流小鼓
の如く赤色活氣及は
観世流太鼓

正 1 9
9.1 交
9.1 内

うき。さらばよるべの。よそならぞ有りし

にかへる。有様かな

下歌 新 中音 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切 五 拍 六 拍 七 拍 八 拍
みやこにだにこいとどめぬお

半声 (キヤドレ) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
んみだなるをいたはしや

●小話 (ヤトリ) 半声 上歌 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
みちのくの。

(コイ金) (打切) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
しのぶにたへぬあめのあた

(コイ金) (打切) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
しのぶにたへぬあめのあた

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
ふりすさひたるをりしもは。

(キウヤト) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
おもひのつゆもちりぢりに

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
こまらのをなかしをしと

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
しをるそでのいろまでも

(キウヤト) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
けふのゆふべのたぐひかなけ

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
ふのゆふべのたぐひかな

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
ふのゆふべのたぐひかな

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
ふのゆふべのたぐひかな

(コイ金) 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 打切
ふのゆふべのたぐひかな

詞^{シテ}如何に案内申しゆはん

詞^{ワキ}誰れにて渡りゆ

ぞ^{シテ}千手の前が来りたる由交れ交れ所

申しゆへ^{ワキ}暫くは待ちゆへ。亭機端を

以て申さうずるにてい^{ツト}身は是れ撞花

一日の業。命は蜂蟻の定なきに似たり心

は獲武が胡圖にとらははれ。岩窟の内にこ

められて。君^{ミコ}恩を忘れぬ志。交れはやうり

がはかりことにて。敵を亡し奮里に帰る。

我れはいつとなく敵陣にこめられて。縲^{オウ}綖

の責をうくる。しらず今日もや限りなら

ん。あ^{ヤサ}ら定めなやい^{ワキ}詞いかに申し上げゆ千

手の^{オウ}糸りにてい^{ツレ}只今は何の爲にてゆぞ

よしよし何ぢにてもあれ。今日の對面は

叶ふよしきと^{ワキ}申しゆへ^{ツキ}畏つてい^{ワキ}如何に申

しい。清^{シヨ}系りの由^ユ申^{マウ}してゆへば。何^{ナニ}と思^{オモ}しる
 しいやらん。今日^{イマ}の清^{シヨ}対^{タイ}面^{メン}は叶^{カナ}ふまじき
 由^ユ仰^{オウ}せ出^デたされてい^イ 是^{コト}れも私^シにあ^アらず。
 頼朝^{ヨシトモ}よりの清^{シヨ}後^ゴにて。琵琶^{ヒヤ}琴^コ持^テたせて
 系^{ケイ}りたり。此^{コノ}の由^ユかさねて清^{シヨ}申^{マウ}しゆへ

清^{シヨ}後^ゴの趣^{ソウ}申^{マウ}してゆへば。これ^{コレ}も私^シにあ^アらず。
 頼朝^{ヨシトモ}よりの清^{シヨ}後^ゴにて。琵琶^{ヒヤ}琴^コ持^テたせて

系^{ケイ}りたり。よしよし御^ミ憐^{レン}りは去^イる事^{コト}な
 れ共^{トモ}。唯^{タダ}こなたへと清^{シヨ}ずれば。其^{ソノ}の
 時^{トキ}千^チ手^テ立^タちよりて

●小話

新古今

古今合

(抄)

地上歌

つま戸^{トリ}

大^{オホ}キウ^ク フー^フ きりり^ス と^ト あしひらく^ク。

御^ミ簾^{レン}の^ノ あ^アひか^カぜ^ゼに^ニほ^ホひ^ヒ来^キる^ク。

を^オな^ナの^ノ み^ミや^ヤこ^コび^ビと^トに^ニ。

ヤヲハ

花

都

人

千手

五

はづかしのながら見みえん

實にトリ

あづまのはてしまで。

ひとのこゝろのあくふかき。

そのなさをけこそみやこなれ。

はなのはるもみぢのあき。

たがおもひ出せなりぬらん。

平

下

中

上

下

中

上

詞「いかに千手の前。昨日白地に申しつる出家

の侍殿の事聞かまほしうこそ候らへ

シテ「さんび其の由申してゆへは。朝敵の流るな

るを私として。出家を件し申さんぞ。思ひ

もよららずと社ひひつれ。わらはも流心

の内。押しはかりまいらせで。如何程こまご

まど申してゆへ共。かひなき出家の法望み。

痛はしう社ゆらん

詞口惜や我れ一の谷に

ていかにも成るべき身の生捕れ。今は東の
果造も。か換に面をさらすこと。前世の
報と云ひながら。カル又思はずも父命によ
り。佛像を亡し人壽を断ちし。現当の
罪を果す事。前業より終はつかしう社
らへ。カル冥々是れは法理り去りながら。か

かるためしは古今に。美き習ひと愛く物を。
獨とな歎き強ひそとよ。冥よく慰め強
へ共。類ひはあらじ憂き身の果。昨日は
都の花と榮え。今日は東の春にきて
うつり替れる。身の程を

●小話

地上歌

おもへただ。

トリ

(新切)

世はうつせみのからころも

千手

七

(ヨイ金)

せはうつせみのからころも。

(ヨイ金)

來つとなれにしつましある。

(カケ切)

みやこ

(和)

のくも井をたちはなれ。

(ギトリ)

はるばる來ぬ

(トリノカ)

る。た

(ヨイ金)

びをしぞおもふおとろへの。

(ツヤ)

憂き身のはてぞかなしき。

(トリ)

みやみ

(和)

づ行くかはのやつはしや。

(ツヤ)

くも手にもものをおもへとは。

(カケ)

かけぬななきけのなかなかに。

(アヒト)

なるるやうらみなるらん。

(カニ)

なるるやうらみなるらん。

ト

一拍 二拍 三拍 四拍 五拍 六拍 七拍 八拍

今日ワキの雨カ中の夕カの空カ。あつれづれを慰めん
 と。襟ツレを抱カきて糸シりつツつ既ルに酒サ宴シを始メ
 んとす。千手カも此シの由シ見るルよりモ。此カ酌シ
 に立ちて重ツレ衡レの。此カ前シにこそ糸シりけれ
 今ツレはいつしか襟ツレの。心シならずズに思シはずモ。手
 まづさへワキぎるカ盃カの。心シひとつツに思シふ思シひ
 まれワキ々カいかに何カにても。此カ者カにと進カむれば

其カ時シ千手カとりあへず。雁カ橋カの重カ衣カたる情カ
 なき子カをカきふカにねカむカ。只カ今カ縁カじ
 終カふ朗カ詠カは。秦カなくもお野カの亭カ作カ。此カ侍カ
 を詠カせば閑カ人カ遠カも。守カるべしとのカ以カ折カな
 りカ。去カながら重カ衡カは今カ生カのカ重カなし
 唯カ東カ世カの便カこそカ吹カかまほしけれと宣カへば
 わらはカ仰カをカ承カり。十カ悪カといふカ共カ。引カ持カす

千手

九

● 揚吟
ウシクセ
唯子は
ひまで

とら 地 朗詠してぞ。かなでける

彩 止ヲ打上合ス

クリシテ 扱も彼重衡は。相國の末の流子とは申せ

共。地 兄弟にも勝れ門にも城えて。父母の

寵愛限なし され世時うつり。平家

の運命悉く。地 月の夜すがら声たてて

なくやをじかの隣の國の。生田の河に身

を捨てふせぎ戦ふと申せ共 森のした

● 仕舞
ツクス園
ヤヨハ

風木の葉の露

地 おとされけるこそあはれ

なれ

いまはあづさゆみ

よしちからなししげひらも

ひかんとするにいづかたも

あみををかきたるごどくにて

のがれかねたるよどびひの

(三) 合

(ツ) ケ

(三) 地

(三) 地

(ツ) クス園

ヤ

ハ

下音

カシ

サ

シ

適

と

淀

鯉

(ツラシ)

いけどらねつーありて憂き。

(三地)

身をうらくづのそままにイ

(カヤ)

いづみははてずして。

(ツラ)

なをこそながせかほへのラ

(三地)

しげふさがが手にわたアリ

(キ)

こまろのほかのみやこいり

(ツラ)

上端 冥にやせのなかは。

(ツラ)

地 さだめなきかなかみ無づき。

(折カ)

しぐれふりおく奈良ざかや

(コス)

衆徒の手にわたりなば。

(折逃)

鬼にもかくにかも果てはせで。

(ハル)

またかまくらにわたさるる。

(三地)

こまはいづくぞやつはしの。

(手)

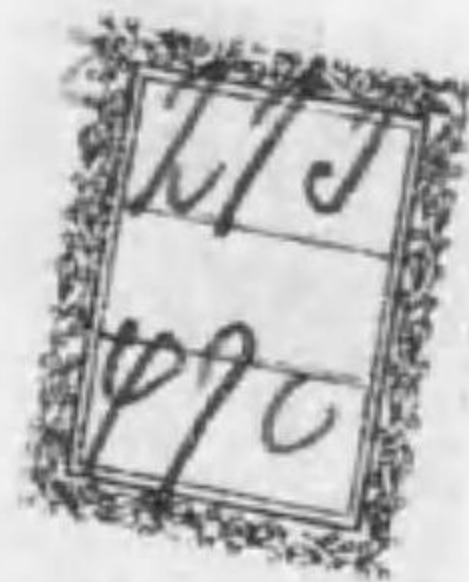
くも井のみややこいつかまた。

内百拾番

卷九拾	卷參拾	卷七	卷壹
小善佛盛白 知 鹽鳥原久鬢 三四九三三	△ 雲隅夕夜龍 林田討會田 院川顔我 二三九五二	誓梅大鶴志 願夕原御幸賀 寺枝幸 三九四四三	鶴斑江田高 飼女口村砂 五七九三二
卷拾貳	卷四拾	卷八	卷貳
唐錦野殺部 生 船木宮石耶 ×九九九×	富花源船春 士氏供日 太鼓筐養橋龍 九九三三三	△ 藤遊熊忠蟻 行 戸柳野度通 三九三三四	●卒都婆小町手平波 紅葉狩 九九三三一
卷壹拾貳	卷五拾	卷九	卷參
● 龍道羽鉢弓 成八 虎寺衣木幡 ×三三三二	● 山櫻繪通皇 姥川垣盛帝 ×三×七三	安二杜△玉 達人景ノ 原靜若清井 八一四××	天三井頼老 井 鼓寺簡政松 七八三五一
卷貳拾貳	卷六拾	卷拾	卷四
● 輪奏木教声 藏上賊教刈 ××八八三	船百芭善水 辨 慶萬蕉界室 士三八×三	浮西松△賀 行 船櫻風寛茂 ×三九九六	融玉楊實白 貴樂 葛妃盛天 八九八七×
上以 番拾百内	卷七拾	卷壹拾	卷五
表 中各曲名ノ下に記載 の數字は季別 ×は雜の印なり 月の名は太陰曆を用ふ	● 大自關女右 然寺耶 居小町花近 會士町七八三 ××七	△ 當葛●鶴八吳 城小町鳥服 士×三九 二	小通采清養 袖小 會町女經老 我町女經老 五九三九四
	卷八拾	卷貳拾	卷六
	狸蟬東安三 丸北宅輪 九八一二九	東成△鞍海 岸陽定馬海 居關宮家狗士 士宮家狗士 三十三二	● 阿柏姨朝竹 澗崎捨長嶋 九十八一三

觀世流謠曲内外及季別一覽

一



大正九年九月十五日印刷
大正九年九月二十日發行

印刷所

東京市麹町區車町貳拾壹番地
小林印刷株式會社

發行所

東京市神田區錦町壹丁目拾番地
檜大瓜堂書店

發行兼印刷者

京都市上京區二條通契屋町角
檜常之助

著作者 田崎延次郎

東京府下豐多摩郡淀橋町柏木百四十三番地



外 六 拾 貳 番

以上 內 百拾番。外 六拾貳番。別 廿八番。番外 八番 合計貳百八番 ●は重習(拾貳種) △は九番習(九種)

卷 五	卷 參 拾	卷 七	卷 壹
雷 國 攝 土 兩 電 柄 待 車 月 八 三 三 × 八	絃 弱 七 法 騎 上 師 落 八 二 八	大 烏 忠 大 吉 瓶 朝 佛 野 狸 子 供 天 々 折 養 人 九 九 士 九 三	逆 九 代 江 喪 世 主 島 覺 矛 戶 四 × 三 九 六 四
卷 六	上 以 番 貳 拾 六 外	卷 八	卷 貳
昭 現 繪 君 在 馬 三 七 節 三 面 分	番 貳 拾 六 外 別 能 廿 八 番	春 東 大 和 鶴 方 布 榮 朔 社 刈 龜 八 七 十 三 一	巴 瓶 經 道 西 一 二 九 九 三
外 番	卷 壹	卷 九	卷 參
神 歌 一	錦 籠 吉 放 淡 太 野 下 戶 鼓 靜 僧 路 四 × × 九 三	● 石 小 舍 土 第 銀 蜘蛛 天 橋 治 × × 七 三	鐘 花 卷 正 嵐 旭 月 絹 尊 山 九 二 七 九 三
木 笛 楠 會 之 卷 露 五 九 五	飛 枕 身 錠 室 蕪 童 廷 潛 君 九 九 九 × 二	松 六 草 生 合 山 紙 洗 田 敦 甫 鏡 浦 小 町 盛 七 ×	野 小 熊 橋 項 守 督 坂 慶 羽 一 八 九 九 九
高 仲 梅 野 物 狂 ×	一 松 胡 須 放 角 仙 虫 蝶 源 生 人 九 九 二 三 八	俊 知 岩 大 金 成 忠 章 船 山 札 度 三 二 九 七 一	雲 藍 鐵 綱 張 雀 染 川 輪 (羅生門) 良 山 × 九 二 九
八 以 番 上	卷 四	卷 貳 拾	卷 六
菊 慈 童 九	歌 水 藤 鳥 三 無 月 寂 舟 笑 占 六 四 九 七	● 望 蠶 碯 戀 重 荷 月 一 六 九 九	車 禪 半 谷 住 師 會 師 行 吉 僧 我 部 九 十 九

終

